今回、「障害児・者といっしょに生きる」というタイトルで、JOCS が障害児・者になぜ関わってきたのか・関わるのか？について考える。答えが出にくい問である。なぜあなたは小児科であるのか、なぜあなたは国際保健に関わるのかは学術的でも、エビデンスに基づくわけでもないだろう。公益社団法人日本キリスト教海外医療協力会（Japan Overseas Christian Medical Cooperative Service：以下 JOCS）は、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい(ヨハネによる福音書 13 章 34 節)」という聖書に従い、会の使命を「イエス・キリストの教えに従い、困難の中にある人々の健康といのちをまもり、人々と苦悩・喜びを分かち合う」としている。また、「すべての人々の健康といのちがまもられる世界」を目指し活動している。人々の健康といのちが脅かされる状況として、医者の不足・医療施設の不足やアクセス不良・きれいな水を入手できないなど衛生状況が悪いこと・マラリアなどの感染症・教育、保健に関する情報の不足・栄養不良などがある。それに対して 3 つの事業を行っている。一つ目は、 医療従事者（ワーカー）の派遣である。クリスチャンの医師や看護師をアジアやアフリカの国に派遣して、地域の人々と共に健康といのちを守る活動を行っている。2 つ目として奨学金支援を行っている。医療サービスが行き届いていない地域で、貧しい人々のために病院で働きたいと願う人々に医療従事者となるため、あるいはより専門の知識や技術を身につけるための奨学金を支援している。3 つ目に、現地の人々や団体が必要としている保健医療活動を協力して行う協働プロジェクトを行っている。その他、国内の啓発活動として使用済み切手運動を行っている。

JOCS の歴史は、前史として医療伝道の歴史がある。医療伝道とは、医療活動をしながら伝道活動することであるが、日本人のよく知っているキリスト教の医療伝道の例としてヘボン、シモンズ、シュヴァイツァー、クリスティーなどがあげられる。それぞれ、医療宣教師として自国以外の地域で活動していた。ヘボン、シモンズはそれぞれ明治初期に日本に来た医療宣教師である。ヘボンはヘボン式ローマ字でも有名である。アルベルト・シュヴァイツァーは 30 歳の時、医療と伝道に生きることを志し、アフリカの赤道直下の国ガボンのランバレネにおいて活動した。クリスティーは 1883 年から満州で活動し、その活動は岩波文庫の「奉天三十年」としてまとめられている。

JOCS のルーツは、1938 年に行われた中国大陸での医療活動にさかのぼる。当時、日本軍の侵攻によって難民が多数出るなど、中国の人々は苦難を強いられていた。その窮状を見かねた日本人牧師の呼びかけに応じて、医師や医学生、看護師等による医療チームが大陸に渡り、協力活動を行った（図 1）。第 2 次世界対戦終了後、中国に派遣された学生医療班のメンバーも含めたクリスチャンの医療従事者が 1947 年夏、福島県阿武隈高原にて農村医療伝道プログラムを実施した。1949 年 1 月、日本各地から横須賀の日本医療伝道会衣笠病院に集まり「日本キリスト者医科連盟」を結成し、医療奉仕活動を始めた。

中国難民救済施療班の壮行会（1938年8月・京都YMCA）
「アジアの呼び声に応えて」日本キリスト教海外医療協力会25年史：隅谷三喜男、著　新教出版社1991年　p15

図 1.

1958 年、日本キリスト者医科連盟の代表（日野原重明、高井俊夫、水野宏、橋本秀子）が香港で行われた東アジアキリスト者医療従事者会議に出席し、アジアの医療従事者を研修のため日本に受け入れることを表明したことに端を発して、海外から保健医療従事者の派遣や、研修支援の要請が続いた。1959 年、日本キリスト者医科連盟は梅山猛医師（図 2）をインドネシアへ派遣するこ

とを決議した。

1.旧い診療所の前にて
インドネシア　梅山 猛(医師)　1961～1967

図 2.

それらの要請に応えるため、JOCS が 1960 年に設立された。JOCS は、日本がアジアの人々に対して犯した戦争への深い反省に立ち、和解と平和の実現を願って設立された。その後、ネパール（図 3）、ナイジェリア（図 4・図 5）、バングラデシュ（図 4・図 5）などアジア、アフリカ諸国へ医師、看護師などを始めとしたクリスチャンの医療従事者を派遣してきた。

ネパール「巡回診療風景」撮影年不詳　岩村昇（医師）　UMN　1962～1980

図 3.

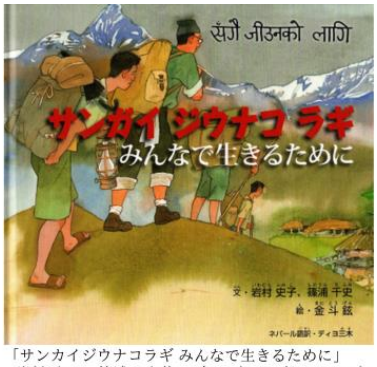
ナイジェリア・バングラデシュ　宮崎 亮（医師）撮影年不詳

図 4.

ナイジェリア・バングラデシュ　宮崎 安子（医師）撮影年不詳

図 5.

そのような活動のなかで、ネパールへ派遣された岩村昇氏からネパールでのある村の青年に関する出来事の報告があった（図 6）。岩村氏が結核患者を診断するために村々を巡回中していた。重い病気のおばあさんがいたが、病院まで運ぶことができる家族がいなかった。重い病気のおばあさんを、ひとりの貧しいネパール人の青年が、山や谷を越え、3 日間も歩いて、病院のあるタンセン病院までかついで運んでくれた。岩村が、お礼にとお金を差し出したところ、青年は受け取ろうとせず、ネパール語で「サンガイ・ジュウナコ・ラギ」と言って立ち去った。その意味は「みんなで生きるために」である。「みんなで生きるために」当たり前のことをしたという意味だった。共生という言葉がまだ一般的ではなかった日本で、JOCS は「みんなで生きる」を実際にあったものがたりの中に発見することができた。「みんなで生きる」は JOCS の会報の名前にもなっている。JOCS から海外へ派遣された医療従事者らは、自らの生き方の中に「みんなで生きる」「ともに生きる」「いっしょに生きる」ことを模索してきた。



「サンカイジウナコラギ みんなで生きるために」
岩村 史子、篠浦千史著：ディヨ伊予、松山.2008年

図 6.

JOCS が組織化され１０年経過した頃には、様々な組織上の問題があった。1971 年世界・日本情勢や JOCS の状況の変化を読み解き、問題を明確にし、JOCS の方向性を検討する会を開催することとなった(図 7)。

第1回バンコック会議に集まったワーカーたち
「アジアの呼び声に応えて」日本キリスト教海外医療協力会25年史：隅谷三喜男、著　新教出版社1991年　p33

図 7.

JOCS 海外医療協力者会議と命名された。この会議には海外に派遣された医療従事者（ワーカー)、理事、若い世代の準備委員などが参加し、バンコクで開催された。通称として JOCS バンコク会議とされた。それから約 10 年おきに JOCS 海外医療協力者会議を危機感の解明・解決のために開催し、過去 10 年とこれから 10 年の JOCS の使命と方法論について祈り求めてきた（表 1)。

JOCS海外医療協力者会議の歴史

1960年	JOCSの誕生	
1971年1月1日～5日	第1回	W11 F4 R3 J5 O7
巨浪中を覆ったプロテストの波　余剰な活力がそのままでは活用しなくなった		P&Pの出発　医療を安易な宣教の手段としないことの確認
1982年12月29日～1983年1月3日	第2回	W12 F2 R5 J11 O16
曲りかどの自覚　南北格差の増大　共に生きえない現実の認識		コミュニティヘルスの視点に立った仕事　共に生きるものとして変えられていくこと
1991年12月28日～1992年1月2日	第3回	W 1 4 F4 PW4 R11 J5 O16
ベルリンの壁の崩壊　南北問題が最重点の時代へ　途上国民の構造的大の顕在化　国内に新しいＮＧＯが次々誕生　ＮＧＯ活動理論・方法論の誕生		信仰を基盤とすることの確認　事務局の強化を含む組織論・方法論の見直し　カンボジアプロジェクト（独自プロジェクト）実施
2000年12月28日～2001年1月12日	第4回	W 9 F1 PW4 R10 J8 O11
21世紀を迎えて　しかし世紀末的不安・不透明感に覆われた世界　日本（JOCS）の高齢化　価値観の多様化　途上国内においても格差の増大		共にたまる・共に再探する　Ｐ＆Ｐの改訂　独自プロジェクトの見直し　モニタリングチームによる継続的活動
2012年12月29日～2012年12月31日	第5回	W4 F0 PW2 R10 J5 O12
9・11で流動化不安定化する国際社会、3・11安全神話の崩壊とボランティアの活躍　NGOの多様化		国内での初めての開催　ミッション、ビジョンの明確化　クリスチャニティの確認　事業分野・形態
	第6回	
？？		？？

表 1.

準備委員は若い世代が担うことによって、若い世代へと継承していく試みの一つとなっている。前回は日本国内で開催され、通称ネクステ（Next Step）会議となっている（図 8)。

2012.年12月29日（土）～2012年12月31日（月）
神奈川県　三浦海岸にて開催

図 8.

JOCS のこれまでの活動の歴史の中で、得意としてきた活動分野がいくつかある。初期から外科医、小児科医、産婦人科医など専門医が診療や臨床教育を通して開発途上国での病院を支援する働きである。また、結核やハンセン病などの感染症対策も JOCS が得意としてきた活動分野である。母子保健活動や栄養支援など公衆衛生的な活動を行っていることもあった。障害分野も JOCS が得意として来た活動分野と言える。障害児・者に関わるはたらきはハンセン病、聴覚障害教育、母子保健活動などでまずは培われてきた。ハンセン病は、「らい菌（Mycobacterium leprae)」が主に皮膚と神経を犯す慢性の感染症である。治療法が確立された現代では完治する病気である。治療する前に進行すると神経に障害が残る場合がある。日本でも過去にはハンセン病回復者は障害を抱えた方が多かったが、発展途上国でもそのような事情があった。また、聴覚障害者に対する支援を行ったこともあった。母子保健活動のなかで、障害児・者と出会うことも多かった。

近年での障害児・者に関わるはたらきとして、理学療法士である山内章子氏はバングラデシュ国内の５県８施設の、リハビリテーション、理学療法の基礎教育、理学療法の技術教育や女性の障害者の精神的ケア（図 9）を行ってきた。

女性の障碍者の精神的ケアを行う山内章子氏

図 9.

また、岩本直美氏はバングラデシュの知的障害者のコミュニティリーダーを務め、知的障害者らの生活基盤を確保し尊厳を守ってきた。

なぜ JOCS が障害児者に関わってきたのか、あるいは関わるのか？について検討していく。社会事業は公的社会事業と民間社会事業がある。阿部は公的社会事業と民間社会事業の関係として「平行棒理論（グレイ）」と「繰り出し梯子理論（ウェッブ婦人）」を紹介している１）。平行棒理論では、公私の取り扱うケースを区分して、それぞれ独立して活動する。例えば、公的社会事業は金銭給付、民間社会事業は自立できるケースを担当するなどが考えられる。繰り出し梯子理論では、公的社会事業は最低生活の保障のための仕事をし、民間社会事業は特定のケースに充分な保護を創意をもって実験的に果たしていく。公的社会事業の上に梯子を繰り出す様に民間社会事業を行う。これらの社会事業の形態はキリスト教団体が行う民間社会事業でも同様である。また民間社会事業の方向性として、「モデルになる」「開拓的である」「橋渡しのための実験」「公的社会事業に対する批判勢力」「社会悪に抵抗する」などが挙げられており、これはキリスト教民間事業の方向性とも一致する。

キリスト教団体が海外で行う民間社会事業として分類されるが、JOCS 会長の畑野研太郎氏は JOCS の特徴とはたしてきたミッションとして、「思想的先見性」「実践的先導性」「日本のキリスト教界の中での役割」「特徴ある組織」「たくさんの子どもを産んできた組織」の５つを指摘した。

思想的先見性としては、「戦争への贖罪」「みんなで生きるの発見」「草の根を目指す」「自立を手助けする」「大病院医療から地域（コミュニティヘルス）へ」「プライマリ・ヘルス・ケア」「政府・社会への発言　その発言を可能とする事業内容」を挙げた。「戦争への贖罪」「みんなで生きるの発見」は前述した。「草の根を目指す」「自立を手助けする」「大病院医療から地域（コミュニティヘルス）へ」については現代の国際協力では当たり前と言えるが、JOCS では前述の海外医療協力者会議（バンコク会議・ネクステ会議）を通して、深い議論を重ね思想的先見性をもって日本の国際協力を牽引してきたと言える。「政府・社会への発言　その発言を可能とする事業内容」としては、発足当時は海外で医療協力をしている日本人医療従事者は少なく政府や社会への発言は少なからぬ影響を持っていた。

実践的先導性として、「前史」「JOCS 設立」「結核医療、乳児・小児栄養、PHC，ハンセン病、障害分野」「現場のワーカーが、働きの中で見出したものが、フィードバックされた」「クリスチャンの伝統が生かされている」が挙げられた。前史は中国へのキリスト者医療従事者の派遣など前述の通りである。「JOCS 設立」に関しては国際協力を民間団体としては他団体に先駆けて設立された。「結核医療、乳児・小児栄養、PHC，ハンセン病、障害分野」では先導して実践してきている。また、「現場のワーカーが、働きの中で見出したものが、フィードバックされ」、組織や全体の活動に生かされている点は現代では当たり前ではあるが、当時は先導的だった。「クリスチャンの伝統が生かされている」としては、クリスチャンは社会において地の塩、世の光（マタイによる福音書５章）となることが求められており、新たな社会活動を先導して行うことも多くある。

日本のキリスト教界の中での役割として「近代の日本社会において、キリスト者がはたしてきた先導的役割の、歴史的･地理的延長線上に、JOCS は存在している」「日本における数少ない真の超教

派の組織である」「キリスト者医科連盟から生まれてきた、キリスト者医療従事者を中核とする組織である」「日本の教会のはたらきのひとつ」「世界と日本のキリスト者を結ぶ道のひとつ」が挙げられている。

特徴ある組織　その理由と限界として、「理念による特徴」「歴史的経緯による特徴」「キリスト教的な特徴」「医師が作った組織」が挙げられている。

たくさんの国際協力団体を産んできた組織として、「アジア協会(アジア友の会)」「AHI(アジア保健研修所))「PHD」「風声寮」「ペシャワール会」「ACEF（アジアキリスト教教育基金)）「どさんこ海外保健協力会」「ごはん基金」「ライフ・リバー」「グレースの会」が挙げられているが、これらの団体は JOCS から派遣された医療従事者や、理事が設立した団体である。

「なぜ JOCS が○○に関わってきたのか･関わるのか？」という問いに答える。サイモン・シネックのゴールデンサークル（図 10）2）によると、卓越した企業や組織を考えると、まず WHY（なぜ）が明確である。そこから、HOW（どのように)、WHAT（何を）を考えるのである。国際保健活動や国際小児保健活動、小児に関わる地域社会活動を実施する際、何を、どんなふうに実施するのかをはじめに計画を立てるのではなく、はじめに WHY（なぜ）についてじっくりと考える必要がある。

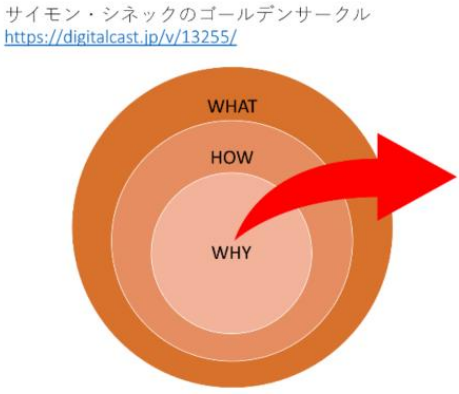


図 10.

JOCS のゴールデンサークル（図 11）は、ものがたりから始まっている。

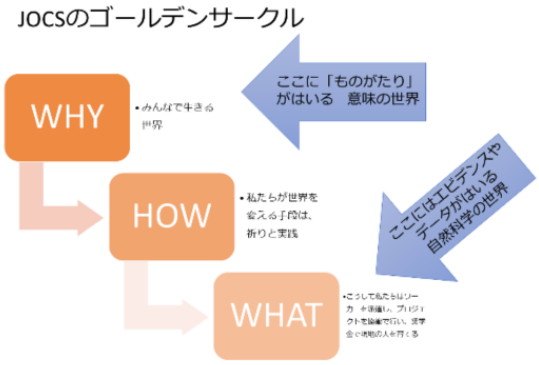


図 11.

例えば、『共に生きる』というあり方が与えられた物語として、「サンガイ・ジュウナコ・ラギ」ものがたりが JOCS には与えられている。畑野研太郎会長は「共に歩いてくださった青年はイエス様だったと思うのです。」と述べている。ゴールデンサークルの WHY はものがたりによって与えられている。意味の世界であり、エビデンスや自然科学的考察の入る領域ではない。一方で HOW や WHAT は意味づけよりもエビデンスや自然科学的考察が重要な領域と言える。JOCS には、前史である 1938 年の中国大陸での医療活動から、「みんなで生きる」の発見、JOCS 海外医療協力者会議の発明とその議論、一人ひとり派遣された医療従事者の発見したものがたりへとものがたりが紡がれている。JOCS の WHY はそれらのものがたりのエキスを凝集したものである。ひとつひとつのものがたりとそのエキスを凝集した JOCS の WHY を語ることなしに、効率的な HOW や、インパクトのある WHAT だけを取り出すならば、それは虚しいものとなる。HOW や WHAT は科学的にエビデンスに従って実証することはでき、それは透明性のある活動には欠かせない。しかし、原動力としてもっとも重要なのはものがたりによって作られる凝集した WHY である。

きっと国際小児保健活動に関わる方々にもそれぞれのものがたりのなかで WHY があるはずである（図 12)。

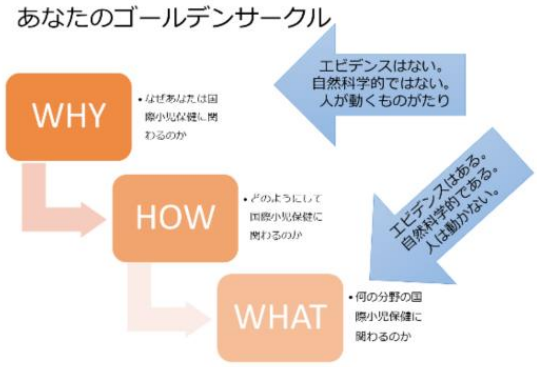


図 12.

それは、エビデンスや科学で語られる HOW や WHAT よりも重要であるかもしれない。

１）阿部志郎.「キリスト教と社会福祉」の戦後. 東京：海声社，2001 年：19 頁

２）Simon Sinek. How great leaders inspire action. TED Talks . https://digitalcast.jp/v/13255/ . 2024-01-28 アクセス